歴史・記録・記憶―歴史実践と路上のアクチュアリティ

牧田義也

キーワード
歴史的探究　不在の痕跡　現実認識

はじめに

二〇一八年二月三日。午前一〇時〇〇分、ＪＲ大阪環状線大正駅改札前で集合した三四名の参加者は、まず市営バスで大正区役所前へ移動した。一〇時二〇分、区役所前広場でこの日のフィールドワーク企画「記録・痕跡・記憶」について趣旨説明が行われる。事前に「大阪港湾地域の歴史と記憶を探るフィールドワーク」とだけ伝えられていた参加者は、この時ようやく企画の概要を知ることになる。フィールドワークの目的は、「記録を手がかりに、過去の痕跡を現在の風景の中に探り、新しい記憶のかたちをつくりだす」こと。一〇時三〇分、町の景色のなかに「過去の痕跡」を見つけて写真撮影するという漠然とした課題のみを与えられ、三〇名超の一団は最初の目的地に向けて歩き出した[1]。

一〇時五〇分。参加者は住宅街から団地を通り抜けて公園に入り、最初の目的地に到着した。ここで参加者には記録史料が配付され、この地区の歴史が説明された。

一九六八年七月一五日付『朝日新聞』記事が紹介される。「大阪市の南西部、大正区の片すみに〝沖縄スラム〟とよばれる一角がある。ジメジメした湿地帯の上にひしめくバラック。そこに約一五〇〇人の人たちが肩を寄せ合って生きている」。五〇年前の記事は「クブングヮー」と呼ばれた同地区の写真とともに、次のように問いかける。「日本の敗戦から二三年。本土の独立後も占領が続き、祖国から引きさかれたままに放置されてきた沖縄。九〇万の住民にとって、祖国復帰は悲願であり、国民全体の思いも、また同じである。しかし、故郷を離れ、一足先に祖国へ帰ってきた人たちの安住できる土地が、スラムの中にしかないとしたら……。その実態は、本土と沖縄の間に横たわる、深い亀裂を象徴しているのではないだろうか[2]」。

一一時〇五分。参加者による討論。記録史料の配付と説明は、参加者の現実認識に影響を及ぼしていく。漠然と「過去の痕跡」を探してきた参加者の意識に、記録史料は「沖縄」という楔を打ち込んだ。すると、それまで気にも留めなかった何の変哲もない町の風景の細部が、「沖縄スラム」の痕跡を示しているかのように浮かび上がってくる。途中で通過した築五〇年近い市営住宅の古ぼけた外観は、かつての「近代的スラム路地裏長屋[3]」を想起させ、大正内港沿いに整備された公園施設の存在そのものが、スラムクリアランスの痕跡のように見えてくる。無論こうした連想に客観的な裏づけはない。重要なのは、過去に関する記録史料が現在の知覚を変容させる契機となったこと自体である。過去の記録が喚起するイメージが、現在の知覚に浸潤する。このとき参加者の現実認識に何が起きたのか。本稿はこの問いを出発点として、当該フィールドワークの経過を辿りつつ、歴史・記録・記憶をめぐる実践の方法と可能性について考察する。

一　物語の論理・探究の論理

本稿が主題とする歴史と現実認識の関係性について、言語論的転回以降の歴史理論は抜本的な問い直しを遂行してきた。ガブリエル・シュピーゲルによれば、言語論的転回(linguistic turn)とは、言語こそが「人間の意識を構成する作用因子」であり、言語を通じて「意味の社会的な生成」が行われ、「世界についての我々の理解は、現在・過去ともに、言語によって予めコード化された知覚のレンズを通してのみ出てくる」という思想潮流の台頭を指す[4]。一九六〇年代半ば、リチャード・ローティの編著を通じて人口に膾炙したこの用語は、言語が人間の現実認識を構成することを示唆し、外的実在を反映・伝達する単なる媒体

として言語を捉えてきた旧来の実証主義史学に対する異議申し立てとなった。[5]

言語論的転回の歴史理論において、歴史叙述とは言語的に構成された過去に関する現実認識の一類型である。歴史叙述の言語的構築性を強調するフランク・アンカーシュミットは、歴史叙述と実在的過去の照応可能性を否定する。歴史叙述の「指示対象となる［外在的な］過去」とは「認識論的に無益な概念である」。過去とは歴史叙述を通じて生成される言語的構築物であり、歴史叙述の外部で実在的過去を認識することはできない。[6] 歴史叙述のテクスト外における実在的過去の認識不可能性という主張は、必然的にテクスト内の言説構造の分析へと研究者を向かわせた。ヘイドン・ホワイトは、歴史叙述を「物語的な散文体の言説という形式をもった言語構造」と規定した上で、歴史叙述の言説構造を修辞学的な視点で分析し、プロットとして類型化した。[7] ホワイトは歴史を物語として捉え、「物語のプロットにおける要素という属性」をもつ事象のみが「歴史的出来事」として叙述に組み込まれると主張し、歴史＝物語論の地平を切り拓いた。[8] 近年では、歴史叙述を言語構造に還元して分析する極端な言語決定論から距離をとり、歴史叙述の対象となる人間の自己や主体性、経験や実践を描出しようとするポスト言語論的転回の試みも生まれている。[9] ただし、言語論的転回が提起した歴史叙述と過去をめぐる認識論上の問題が消失したわけではない。

ホワイトに代表される歴史＝物語論は、認識論的観点から実在的過去の客観的な叙述可能性を否定し、歴史叙述を物語のプロットに依存する相対的な表象として理解した。「歴史的現象のあらゆる表象には抹消不可能な相対性がある」。[10] これに対してカルロ・ギンズブルグは、こうした歴史＝物語論を極端な懐疑主義と捉え、その歴史表象論を「歴史的かつ論理的に支持できない」相対主義として批判する。[11] 歴史叙述を過去の現実から乖離した表象の問題に還元する歴史＝物語論は、「歴史の語りとフィクションの語りとの区別を根本的に無効化してしまった」。[12] しかし、歴史の語りは記録史料に依拠する。当然のことだが、記録史料は歴史叙述に先立って作成され、物語のプロットに組み込まれる以前に、特定の歴史的文脈の中で固有の意味を予め付与されている。記録史料の意味は物語内の言説構造だけで決定されるのではなく、史料の指示対象である物語外の現実にも規定されるのである。[13] ギンズブルグによれば、こうして物語と現実を連絡して歴史叙述を成立させる記録史料とは、実証主義者が信じるような現実をありのまま伝える「開かれた窓」でもなければ、歴史＝物語論者が主張するような物語と現実を隔てる「壁」でもなく、特定のコー

ドに準拠した「歪んだガラス」である。[14] 歴史家は個々の記録史料がもつ「歪み」に対して徹底した史料批判を行うことで、「ガラス」の奥に過去を見透そうとするのである。

ギンズブルグは歴史叙述の基盤となる記録史料に焦点を当てつつ、歴史家の営為を「裁判官」との類比によって精緻化し、推論を通じた過去の探究可能性について考察する。歴史家の主体的実践において、記録史料とは過去の現実を立証するための証拠(evidence)である。そして、証拠に基づいて過去の現実を立証する点で、歴史家と裁判官は類似する。両者はともに、歴史的出来事ないし法律行為の主要行為者Xが、なんらかの行為Yを為したことを、証拠に基づいて立証する。[15] ただし、歴史家と裁判官は、証拠の蓋然性に対して異なる判断を示す。裁判官が確実性(certainty)を基準に記録史料の証拠採用を行うのに対して、歴史家は蓋然性(probability)を基準として、記録史料の特殊な記述を周辺的文脈と照合することで証拠採用する。[16] このように必ずしも確定的ではない証拠の集積・照合を通じて過去の現実を探究する歴史家の手法を、ギンズブルグは推論的パラダイム(conjectural paradigm)と呼ぶ。断片的な証拠を手掛かりに推論を進め、過去の現実に迫ろうとする歴史家の技芸は、山中に残された足跡を頼りに獲物を追う狩人や、些細な症候を見逃さずに診断を下す医師、あるいは僅かな筆致の違いから作者を特定する絵画鑑定士の仕事等に比せられる。[17] 歴史家にとって記録史料とは、物語の構成要素である以前に推論の基盤となる過去の痕跡であり、痕跡の確保(Spurensicherung)[18] は過去の現実を探究するための要件なのである。

言語による過去の表象可能性を問う歴史＝物語論に対して、ギンズブルグは歴史研究の実践的営為に焦点を移行し、歴史家による過去の探究可能性を問う。また、歴史＝物語論が歴史叙述を所与のテクストとして分析するのに対して、ギンズブルグは過去の現実を探究する歴史家によってテクストが生成される局面に着目する。ただし、対立的に捉えられがちな両者の関係は、本来的には相互補完的でありえる。歴史(history)という言葉の語源(ἱστορία, historia)には、「物語」と「探究」という両義性がある。[19] 歴史＝物語論の分析的な「物語の論理」と、ギンズブルグが提起する実践的な「探究の論理」は、歴史叙述の構造と生成という異なる位相に対して別の角度から光を当てる試みとして理解すべきであろう。

二　痕跡の不在・不在の痕跡

歴史的探究の要件となる痕跡(trace)という概念は、大

阪港湾地域のフィールドワークで生じた出来事を理解する上で重要な手がかりとなる。一九一〇年代以降、大阪市では沖縄出身者の流入が続き、同郷集団を基盤とした沖縄人コミュニティが市内各所で形成された[20]。最大の集住地区であった現大正区北恩加島地区には一九三五年時点で八五〇余戸・六、五〇〇余人が居住し、その多くが近傍の紡績工場、鉄工所、製材所、煉瓦工場等で職工・鉄工として就労した[21]。大阪市民生局報告書（一九六五年）によれば、北恩加島及び隣接する小林地区は「不良住宅密集地域」であり、「全体として周囲の一般地区とは非常に異つた特有の社会的雰囲気」を帯びた[22]。同地区は「現金の持ち合わせのない下層階級の人々や、農村、地方、沖縄などよりの流入者」で溢れたが、生活環境は「湿地帯がゴミやおかくずで固められているため、歩いても土地がブヨブヨとした感じで雨が降ればスラム地区内の露地は水びたしとなり、数日間もどろ泥状態が続く」劣悪な衛生状態であった[23]。しかし、戦災復興土地区画整理事業を嚆矢として、その後二〇世紀中庸を通じて継続的に実施された区画整理・住宅改良事業によって、大正区では市営住宅・改良住宅の建設着工が相次ぎ、「不良住宅」は徐々に減少していった[24]。特に一九六九年後半に相次いだ大火災は行政の住宅改良事業を後押しし、同年一二月一一日、大阪市は小林地区の沖縄人集住地帯について「鉄筋五階建住宅一五〇戸の建設に着工するのを手はじめに、四カ年で改良計画を進める」ことを発表した[25]。一九七〇年には「不良住宅」が沿岸に密集した大正運河自体が埋め立てられた一方で、翌年には旧運河沿いで公園住区方式による高層住宅の建設を進める「千島公園住区計画」が発表され、面開発事業による「不良住宅密集地域」の一掃が図られた[26]。近隣の平尾町への住民の移住も進み[27]、「クブングワー」の痕跡は外形上、完全に消失したようにみえる。

大阪港湾地域のフィールドワークで参加者がまず直面したのは、以上のような歴史的経緯を背景とした現在の知覚における「痕跡の不在」であった。かつて「クブングワー」が存在したことを指し示す直接的・間接的な痕跡は、区画整理・住宅改良事業の結果、現在の知覚可能な空間から物理的に消去されてしまった。記録史料の配布とその説明は、現在の知覚にとって元来存在しなかった謂わば「不在の痕跡」を、知覚の埒外から挿入したことを意味する。かつて・そこに存在した痕跡を、いま・ここで見出すことができない。痕跡の確保を要件とする歴史的探究にとって、痕跡の不在・不在の痕跡は何を意味するのか。

現在の知覚と過去の痕跡の関係を考える上で、チャールズ・S・パースの記号分類は鍵となる示唆を与える。パー

スによれば、記号(sign)は表意する対象との関係の仕方から、類似記号(icon)・指標記号(index)・象徴記号(symbol)の三種類に分類される。類似記号が性質の類似に基づいて対象を表意するのに対して、指標記号は主に対象との現実的な結合によってその対象を表意する。象徴記号は解釈を規定する規則・法則として対象を表意する。[28]これら三種類の記号のうち、現在の知覚における過去の痕跡は、第一義的には指標記号の対象となる。指標記号の対象となる痕跡について、パースは「弾丸の穴がある土」という例を挙げる。「たとえば、発砲の痕跡として弾丸の穴がある土がそうである。というのも、もし発砲がなかったならば、そこに穴もなかっただろうから」。この場合、「弾丸の穴がある土」という観念は、実際に穴があいた土という対象＝痕跡と結びついて、過去にそこで起きた「発砲」という出来事を示す指標記号となる。ただし、対象との現実的な結合を前提とする指標記号は、「対象が除去されると直ちにそれを記号にしている特性を喪失」してしまう。穴があいた土が物理的に除去された場合、もはや発砲の事実を現在の知覚を通じて立証することは不可能になる。[29]同様に「クブングワー」の痕跡抹消が例示するのは、知覚可能な痕跡の不在が指標記号の喪失に帰結し、過去の直示的な把捉が困難に陥った状況である。

フィールドワーク中に配布・説明された「クブングワー」の記録史料は、現在知覚される町の風景に対して質的類似性も現実的結合も有さない。それ故、現在の知覚において記録史料は類似記号あるいは指標記号として機能しえない。この場合、記録史料はむしろ知覚の埒外から、象徴記号として現実認識に介入する。パースによれば、象徴記号は「記号と対象の事実的な結合を確立できる何らかの作用」がなくても、「自然な本能」「知性の働き」あるいは「慣習」に基づいて対象との結びつきを実現する。[30]また、象徴記号が表意する個別的な対象は、解釈を規定する規則・法則を具現化(embodiment)する。[31]そして、象徴記号は概念的思考を通じて、それ自体を対象として新たな象徴記号を生み出す。[32]つまり、「クブングワー」の記録史料は、それがまさにその場所と関係する真正な記録として歴史家によって提示・担保され、参加者によって承認されることで、現在知覚される風景と結びつけられる。また、記録史料は現在の風景に対する解釈を規定する規則・法則として作用し、その結果たとえば「クブングワー」の痕跡の不在自体が、スラムクリアランスという出来事を具現化する痕跡として、逆説的に解釈されるようになる。そして、記録史料から生成された解釈は別の解釈を派生し、意識の中で「クブングワー」に関する「継起的な解釈の連続」[33]を原理的には

無限に生み出していく。このように記録史料が「不在の痕跡」の役割を担うとき、それは知覚の埒外から対象と結合し、過去の観念を起点として現在の解釈を変容させることで、新たな現実認識をつくり出す契機となるのである。

三　現実認識の撹乱・更新・再編

記録史料は、過去の現実を推論する歴史的探究の要件であり、過去と現在を結びつけることで現実認識を変容させる基準点となる。では、記録史料が「不在の痕跡」として現実認識を変容させるとき、人は何を経験しているのだろうか。まず、現在を生きる人間は実在的過去を直接経験することはできない[34]。また、歴史的探究は過去の事象を直接観測することはできず、探究は断片的な証拠に基づく推論という形式を取らざるをえない。一方で、アンリ・ベルクソンによれば、現在の事象のみを指向する純粋知覚も実際上成立しえない。過去の記憶を完全に排除して現在の外的対象に局限された純粋知覚（perception pure）とは、「事実上というより権利上存在する」仮構に過ぎない[35]。「実際には、想起（souvenirs）が染み込んでいない知覚は存在しない」のであり、現在の知覚で得られた感覚的情報には、過去の経験を通じて蓄積された情報の断片が不断に混入していく[36]。また、「純粋な現在」とは「未来を侵食する過去の捕らえがたい進行」であり、この未来と過去の不分明な境界を一定の持続（durée）として延伸する記憶（mémoire）によって知覚は可能になる。その意味で、「すべての知覚はすでに記憶である[37]」。こうして過去から未来へと継起する知覚は、記憶を通じて個人の経験として統合され、主観的次元で安定した現実認識を構築する基盤となる。これに対して記録史料は、経験の外部から現実認識に挿入され、個人的記憶の枠外から現在の知覚に影響を及ぼす。記録史料は知覚可能な対象から生成される解釈を特定の方向へと誘導し、個人の主観的次元で安定していた現実認識に対して、一定の強制力を伴った外的な力として変容を迫るのである。

記録史料は謂わば経験の彼岸から他者として到来し、自己の経験に閉ざされた現在の知覚を特権化することを許さない。そして、それ故にこそ記録史料は、現実認識を撹乱・更新・再編する決定的な起点となりえるのである。午前一一時四〇分、フィールドワーク参加者は旧大正運河沿いを歩いて小林地区を通過し、平尾本通商店街に到着する。この過程で参加者は、「沖縄」の明示的な痕跡を多数発見する。大阪沖縄会館を通り抜け、住宅街ではシーサーの像を見つけ、商店街では沖縄物産を目にする。ただし、この

地域で沖縄料理店や食料品・民芸品店等の沖縄関連店舗が急増したのは、実際には一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代初頭の「沖縄ブーム」以降である。参加者が目撃した顕示的な表徴はむしろ「伝統の創造」に類する[38]。一一時五〇分、こうして「沖縄」という記号の支配的影響下に置かれた参加者に対して、新たな記録史料が配布・説明される。配布されたのは「内鮮要覧大正区警察署管内」という標題の地図で、一九四三年前後の同区内「朝鮮人密集地」や「集団移入鮮人宿舎」の位置情報が記載されている[39]。史料説明は、通称「馬小屋」と呼ばれた旧朝鮮人密集地の付近で行われた。一九三〇年代にこの「馬小屋」で幼少期を過ごした崔碩義は、「密集部落の中に入ると、路地が迷路のように入り組み、昼でも薄暗かった。家の屋根は主にトタンとコールタールを塗った油紙を使っていて、本格的な瓦ぶき屋根はなかった」と回顧する[40]。一九三五年の大阪市社会部労働課の報告書によれば、「朝鮮人住宅の多くは腐朽頽廃を極めた不良住宅」であり、「所謂家ならぬ『家』」であった[41]。そして、この「馬小屋」の痕跡も現在では「跡形も留めず」抹消されている[42]。それまで「沖縄」という記号が一元的に方向づけていた参加者の現実認識は、このように「朝鮮」という別の記号を挿入されることで撹乱され、やがて多元的な解釈の複合によって新たな現実認識へと更新・再編されていく。

記録史料を基点として現実認識を撹乱・更新・再編する歴史的探究は、痕跡を抹消された過去の出来事を忘却の淵から引き上げることで、共同体の支配的な集合的記憶を動揺させる。午後一二時二〇分、参加者は千本松渡船場から木津川を船で渡り、対岸の住之江区北加賀屋地区に入った。二〇世紀前半に造船業で栄えた同地区では近年、文化芸術活動を通じた地域活性化の動きが加速している。二〇〇四年に名村造船所大阪工場跡地で開始された“NAMURA ART MEETING”を嚆矢として、二〇〇九年には工場施設跡地や空き家を創造活動のために活用する「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」が提唱され、同地区を「文化芸術が集積する創造拠点」へと変貌させる試みが続いている[43]。地区内にはウォールアートが点在し、『毎日新聞』によれば「休日には『インスタ映え』を狙って散策する若い女性らの姿も増えている」。こうして「壁を背景に自撮りをして『インスタグラム』に投稿する『カベジョ（壁女）』[44]」が街路に溢れる影で、以前この地区に溢れていた港湾労働者の記憶は徐々に稀薄化していく。ある造船所職員は、かつて同地区の造船所主要三社を指して「鬼の佐野安地獄の名村 情け知らずの藤永田」と呼び習わしたことを回顧し、「当時木津川べりにあった川筋造船所を御存じの

方々には、言い得て妙であると思われる方が多いのかも知れない」と述懐する。[45] しかし、当時を「御存じの方々」はいまや少ない。そして、ときとして暴力的な港湾労働者の世界という過去は、「カベジョ」が街歩きをする現在と鋭い対照をなすとともに、地域の民間企業・行政・非営利団体が謳う文化芸術の創造拠点という歴史＝物語のプロットから逸脱する。歴史的探究は、このように共同体の支配的な集団的記憶からこぼれ落ちてきた過去の現実をすくい上げ、地域の自己意識へと再編入することで、歴史＝物語のプロットを書き換えることを企む。

二〇世紀前半、大阪港湾地域には帝国日本の植民地統治と連動して、さまざまな労働者が流入した。木津川筋の造船所にも臨時工や下請職工が各地から集まり、これらの港湾労働者には朝鮮半島出身者も多く含まれた。そして、アジア太平洋戦争中には連合国軍捕虜とともに、多くの労働者が軍需工場の工員として徴用された。戦時中、藤永田造船所に徴用された小野十三郎は、木刀を携えた監視者に引率されて作業に赴くオーストラリア人捕虜の一団と毎朝すれ違ったという。捕虜たちは「身なりはみすぼらしく、髪ものび放題で、その上みな栄養失調でむくんだ顔をしていた。揃いもそろって大男だけに、それがかえって哀れだった」。[46] 同造船所で労務部訓育課に配属された小野は、指導員として「朝鮮徴用工」や中国人「苦力」を監督したが、脱走が絶えなかったと振り返る。[47] 一九四二年に名村造船所で徴用された朴聖沢は「死を覚悟して逃げ」、埼玉県吉見町の中島飛行機地下工場に流れ着いた後、各地を転々としながら日雇労働を続けたと証言する。[48] 一九七四年、名村造船所は佐賀県伊万里市に新工場を建設し、木津川筋の大阪工場は一九七九年に閉鎖された。

歴史的探究は、忘却の淵にある過去の現実を呼び起こし、現在の現実認識に介入することで、別様でありえる未来へと投企することを含意する。二〇〇七年、名村造船所大阪工場跡地は経済産業省の「近代化産業遺産群33」に選定され、現在は「〈廃墟のポテンシャル〉を最大限に活かしリノベーションされたユニークな空間」として、文化芸術活動の利用に供されている。[49] しかし、アートイベント等でこの造船所跡地を訪れる人々の多くは、かつてそこで総計八〇三人（一九四二―一九四五年）の徴用工と一一〇人の連合国軍捕虜が就労した過去を知らない。[50] 人がこの過去の現実と対峙するとき、造船所跡地の空間は異なる相貌を現し、現実認識は変容を迫られる。ヴァルター・ベンヤミンが指摘するように、「文化財（Kulturgüter）」とは現在の支配者が過去から継承する戦利品である。そして、「文化財」は過去の被支配者たちによる「言い知れぬ苦役」を動

員して作られたが故に、「それが文化の記録であることは、それが同時に野蛮の記録でもあることなしには決してありえない」[51]。歴史的探究は、「文化財」の過去に秘匿されたこのような「野蛮の記録」を暴き出す。そして、過去の被支配者たちの声をすくい上げることで、過去と現在の関係を構造化した既存の支配的な布置(Konstellation)を変動させ、新しい現実認識に基づいた別様の未来を思い描く余地を生み出すのである。一三時四五分、フィールドワークは北加賀屋公園で終了し、その後名村造船所跡地で開催されたワークショップは同日夜一九時過ぎまで続いた。

おわりに

本稿はそれ自体が過去に行われた歴史実践の一つの記録という性格をもつ。既述のとおり、歴史実践(historical practice)には、過去の記録史料に依拠して、行為遂行的に現在の現実認識を変容させる働きがある[52]。本稿が叙述した大阪港湾地域でのフィールドワークは、写真・地図等の記録史料を手がかりとして、特定の場所に関係する現実認識を撹乱・更新・再編する試みであった。従来の記憶論・歴史認識論の多くは、記念碑や遺構、展示施設等、現在知覚可能な過去の痕跡に注目してきた。これに対して、本稿はむしろこうした痕跡の不在状況に着目し、記録史料を知覚の埒外から挿入される「不在の痕跡」として位置づけ、その意味と機能について考察した。こうして歴史的探究を文書館の外へと拡張し、路上のアクチュアリティに接続するとき、歴史学は過去を対象とする分析的営為を超えて、開かれた未来へ向けた実践的な構想力を獲得する。歴史学の社会的意義は、現代社会の諸問題を解決するための教訓を引き出すために、過去の類似した前例から学ぶ、といった実利的効用に限定されない。ある事象の過去について知ることは、その事象に関する現在の理解に影響を及ぼす。過去について知ることは、現在に対する我々の認識を否応なく変容させ、新たな現実認識は別様の未来を構想する端緒となるのである。

「クブングゥー」の過去と現在（大阪市大正区北村付近）
上：1968 年　出典：『朝日新聞』1968 年 7 月 15 日。
下：2018 年　出典：筆者撮影、2018 年 1 月。

註

（1）フィールドワーク「記録・痕跡・記憶」（進行：藤井光・牧田義也）、二〇一八年二月三日。関連企画 Project Intersectionワークショップ「Intersection I: 地域・歴史・アートの狭間で」（藤井光・原田裕規・飯山由貴・上崎千／実行委員会：牧田義也・小森真樹／主催：Network Trans-Section; 立命館大学政策科学部牧田ゼミ）、同日開催。

（2）『朝日新聞』一九六八年七月一五日。

（3）大阪市民生局『大阪市民生事業概要』大阪市民生局、一九六五年、六七頁。

（4）Gabrielle M. Spiegel, “Introduction” in *Practicing History: New Directions in Historical Writing after the Linguistic Turn*, ed. Spiegel (New York, NY: Routledge, 2005), 2.

（5）Richard M. Rorty, ed., *The Linguistic Turn: Essays in Philosophical Method* (Chicago, IL: University of Chicago Press, 1992[1967]). ただし、言語論的転回は均一な思想潮流ではなく、英語圏に限定しても多様な研究動向を内包したことに留意したい。Judith Surkis, “When Was the Linguistic Turn? A Genealogy,” 700-722; Gary Wilder, “From Optic to Topic: The Foreclosure Effect of Historiographic Turns,” 723-745; and James W. Cook, “The Kids Are All Right: On the Turning of Cultural History,” 746-771, all in AHR Forum: Historiographic “Turns” in Critical Perspective, *American Historical Review* 117, no. 3 (June 2012). 日本における言語論的転回をめぐる議論は以下を参照：長谷川貴彦『現代歴史学への展望：言語論的転回を超えて』岩波書店、二〇一六年；岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺賢一郎編『歴史を射つ：言語論的転回・文化史・パブリックヒストリー・ナショナルヒストリー』御茶の水書房、二〇一五年；岡本充弘『開かれた歴史へ：脱構築のかなたにあるもの』御茶の水書房、二〇一三年。

（6）Quotation from F. R. Ankersmit, “Reply to Professor Zagorin,” *History and Theory* 29, no. 3 (October 1990): 281.括弧内引用者。See also Ankersmit, “Historiography and Postmodernism,” *History and Theory* 28, no. 2 (May 1989): 137-153, esp. 143; Gabrielle M. Spiegel, “History, Historicism, and the Social Logic of the Text in the Middle Ages,” *Speculum* 65, no. 1 (January 1990): 59-86.

（7）Hayden White, *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe* (Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1973), ix.

（8）Hayden White, *The Practical Past* (Evanston: Northwestern University Press, 2014). 歴史＝物語論について以下も参照：鹿島徹『可能性としての歴史：越境する物語り理論』岩波書店、二〇〇六年；貫成人『歴史の哲学：物語を超えて』勁草書房、二〇一〇年。

（9）Spiegel, “Introduction” in *Practicing History*, 1-32; 長谷川『現代歴史学への展望』九九―一二七頁。

（10）Hayden White, “Historical Emplotment and the Problem of Truth,” in *Probing the Limits of Representation: Nazism and the “Final Solution,”* ed. Saul Friedlander (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1992), 37.

(11) Carlo Ginzburg, "Just One Witness," in *Probing the Limits of Representation*, ed. Friedlander, 93. ただし、ギンズブルグによる批判とホワイトの論点は必ずしもかみ合っていない。上村忠男『歴史家と母たち：カルロ・ギンズブルグ論』未來社、一九九四年、一五六—二三〇頁。

(12) Ginzburg, *Threads and Traces: True False Fictive* (Berkeley, CA: University of California Press, 2012), 2.

(13) Ginzburg, "Checking the Evidence: The Judge and the Historian," *Critical Inquiry* 18 (Autumn 1991): 84.

(14) Ginzburg, *History, Rhetoric, and Proof: The Menahem Stern Jerusalem Lectures* (Hanover, NH: Brandeis University Press/Historical Society of Israel, 1999), 25.

(15) Ginzburg, "Checking the Evidence," 84-85.

(16) Ginzburg, *The Judge and the Historian: Marginal Notes on a Late-Twentieth-Century Miscarriage of Justice*, trans. Antony Shugaar (New York, NY: Verso, 1999), 18. See also Ginzburg, *Threads and Traces*, 57.

(17) Ginzburg, "Morelli, Freud and Sherlock Holmes: Clues and Scientific Method," trans. Anna Davin, *History Workshop Journal* 9, Issue 1 (1 March 1980): 5-36.

(18) Ginzburg, *Spurensicherungen: über verborgene Geschichte, Kunst, und soziales Gedächtnis*, trans. Karl Friedrich Hauber (München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1988).

(19) *Oxford English Dictionary*, 3rd ed. (2012).

(20) 大阪沖縄県人連合会『雄飛—大阪の沖縄』大阪沖縄県人連合会、一九八七年、四七頁。

(21) 水内俊雄「大阪市大正区における沖縄出身者集住地域の『スラム』クリアランス」『空間・社会・地理思想』六号（二〇〇一年）：二六頁。大阪の沖縄出身者その他マイノリティの歴史については以下も参照：水内「大阪における都市空間の生産と場所の政治化：『公都』・『民都』の政治地理」佐藤卓己編『歴史のゆらぎと再編』岩波書店、二〇一五年、二〇三—二三八頁；水内「マイノリティ／周縁からみた戦後大阪の空間と社会」『日本都市社会学年報』二三号（二〇〇五年）：三二—五六頁；岸政彦「自己言及と差別：高度成長期における沖縄人の本土移動体験」『人権問題研究』一号（二〇〇一年）：一三五 -一五三頁。「沖縄人」「沖縄県人」の歴史的形成については、坂下雅一『「沖縄県民」の起源：戦後沖縄型ナショナル・アイデンティティの生成過程、一九四五—一九五六』有信堂高文社、二〇一七年；安井大輔『沖縄らしさの社会学：多文化接触領域のエスニシティ』晃洋書房、二〇一七年。

(22) 大阪市民生局『大阪市民生事業概要』大阪市民生局、一九六五年、六七頁。

(23) 大阪市民生局社会課・大阪市立大学・社会調査研究会『大阪市環境改善地区総合実態調査報告書』大阪民生局、一九六八年、七七—七八頁。

(24) 水内「大阪市大正区における沖縄出身者集住地域の『スラム』クリアランス」、二九—三四頁。

(25) 『朝日新聞』大阪版夕刊、一九六九年一二月一一日。

(26) 日本住宅公団大阪支所『千島公園住区計画』パンフレット、一九七一年、大阪市立中央図書館蔵。

(27) 大正区沖縄県人会『大正区沖縄県人会結成五十周年記念誌』大正区沖縄県人会、一九八七年、七〇頁。

(28) *The Collected Papers of Charles Sanders Peirce* (hereafter cited as *Collected Papers*), ed. Charles Hartshorne and Paul Weiss (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1931-1958), 2.274-2.301.
(29) *Collected Papers*, 2.304.
(30) *Collected Papers*, 2.307.
(31) *Collected Papers*, 2.293.
(32) *Collected Papers*, 2.302.
(33) *Collected Papers*, 2.303.
(34) 過去の経験と経験性（experientiality）に基づく過去への接近の困難については、Kalle Pihlainen, "The Eternal Return of Reality: on Constructivism and Current Historical Desires," *Storia della Storiografia* 65, no.1 (2014): 103-115. See also Pihlainen, "What if the past were accessible after all?" *Rethinking History* 16, no.3 (September 2012): 323-339.
(35) Henri Bergson, *Matière et mémoire: Essai sur la relation du corps á l'esprit* (Paris: Quadrige/Presses Universitaires de France, 1939), 30.
(36) Bergson, *Matière et mémoire*, 30.
(37) Bergson, *Matière et mémoire*, 30-31, quotation from 167.
(38)『朝日新聞』二〇〇〇年九月二二日、二〇〇五年一二月二四日。真鍋一弘「大阪市大正区における沖縄関連店舗の立地展開」『立命館地理学』一七号（二〇〇五年）：八七―九九頁。See also Eric Hobsbawm and Terence Ranger, eds., *The Invention of Tradition* (New York: Cambridge University Press, 1983).
(39) 大阪・中国人強制連行を掘り起こす会編『大阪と中国人強制連行』大阪・中国人強制連行を掘り起こす会、一九九九年、一五四―一五五頁。
(40) 崔碩義『在日の原風景：歴史・文化・人』明石書店、二〇〇四年、一三頁。
(41) 大阪市社会部労働課『大阪市住宅年報（昭和八年版）』大阪市社会部報告一八六号、一九三五年、一八頁。ただし、「馬小屋」があった「小林町及船町のバラツクは一部落を形成し一家族三、四人のものが四畳半二室位の所に比較的余裕ある生活を営み半永久的のもの」という記述もある。大阪市社会部調査課『バラツク居住朝鮮人の労働と生活』大阪市社会部報告五一号、一九二七年、七頁。
(42) 崔『在日の原風景』、二一頁。
(43) 近代化産業遺産（名村造船所大阪工場跡地）を未来に活かす地域活性化実行委員会『北加賀屋レポート：北加賀屋のいまむかし』同実行委員会、二〇一〇年；「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」おおさか創造千島財団、パンフレット、二〇一三年；「北加賀屋アートマップ：Kitakagaya Chaos」おおさか創造千島財団、パンフレット、二〇一八年。
(44)『毎日新聞』大阪版、二〇一八年四月一五日。
(45) 杉山和雄「川筋の造船屋：名村源之助翁の足跡」関西造船協会『航跡：船匠たちから次代への伝言』関西造船協会創立九〇周年記念誌、二〇〇二年、三七頁。
(46) 小野十三郎「猿のこしかけ」『小野十三郎著作集』三巻、筑摩書房、一九九一年、一一九頁。
(47) 小野「奇妙な本棚」『小野十三郎著作集』三巻、九五頁。

（48）朴聖沢「過去への真の反省を：大阪名村造船」朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行の記録：中部・東海編』柏書房、一九九七年、二九一—二九三頁。

（49）『北加賀屋レポート』、八—一〇頁。

（50）名村造船所百年史編集委員会『名村造船所百年史』凸版印刷、二〇一二年、六八頁。

（51）Walter Benjamin, “Über den Begriff der Geschichte,” Benjamins Handexemplar, in vol. 19 of *Werke und Nachlaß: Kritische Gesamtausgabe* (Berlin: Suhrkamp Verlag, 2010), 34.

（52）この点で、本稿における「歴史実践」の意味内容は、他の定義と比較してより限定的である。たとえば以下を参照：保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店、二〇一八年、五五頁：歴史学研究会編『第四次現代歴史学の成果と課題：第三巻歴史実践の現在』績文堂出版、二〇一七年、vi頁。

（立命館大学政策科学部助教）

At the Intersection of the Past and Present: History and Historical Practice on the Street

MAKITA, Yoshiya

This essay examines the intersection of the past and present in urban landscapes through a methodological inquiry of historical practice at street corners in Osaka, Japan. In the first half of the twentieth century, the rise and fall of the Japanese empire facilitated the transnational movement of people from in and outside of its overseas territories. The city of Osaka, one of the major industrial centers in modern Japan, attracted a large force of common laborers from the outskirts of the empire. After the collapse of the empire, part of these laborers settled down in the city, maintaining their ethnic and other ties with their hometowns and thus making the city as a hub of their transnational networks. The long-lasting influx of various groups of people with diverse backgrounds gradually eroded the cityscapes of Osaka, continuously shaping and reshaping the social structure of the city up to the present time. The urban landscapes of Osaka have hence come to represent the cultural hybridity with multiple historical layers of ethnic and other minority groups.

Drawing upon experimental fieldwork conducted in the port districts of Osaka in 2018, this essay inquires into the ways in which these multiple layers of the historical past could exert influence over the present perception of the urban landscapes. The multicultural past sets the basic contours of urban space at the structural level. With ostentatious signs of ethnic enclaves, ethnic tourism has developed in some areas. But past experiences of these minority groups, especially their struggles with economic exploitation and racial discrimination, have often become invisible in the cityscapes. Massive waves of urban renewal erased the traces of the past at various localities in the post Second World War era. In the absence of visible traces of the past in the current landscapes, historical records and documents could provide critical clues to restore past memories in the present perception. By focusing on the interfusion of memory and perception through the use of historical sources, this essay illustrates the genesis of new reality at the intersection of the past and present.